

各関係機関長 殿

香川県農業試験場病虫害防除所長  
(公印省略)

平成30年度病虫害発生予報第11号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
モモ	縮葉病	並
	<b>せん孔細菌病</b>	<b>やや多</b>
カキ	炭疽病	並
	フジコナカイガラムシ	並
ブロッコリー	黒腐病	並
	<b>花蕾腐敗病</b>	<b>やや多</b>
	<b>べと病</b>	<b>やや多</b>
	菌核病	並
レタス	<b>灰色かび病</b>	<b>多</b>
	<b>菌核病</b>	<b>やや多</b>
	<b>べと病</b>	<b>やや多</b>
	腐敗病	並
	斑点細菌病	並
	ナモグリバエ	やや少
タマネギ	<b>べと病</b>	<b>やや多</b>
	白色疫病	並
	腐敗病	並
ニンニク	春腐病	並
野菜、花きの 共通害虫	アブラムシ類	並
	<b>ネギアザミウマ</b>	<b>多</b>

**太文字の病虫害**：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

\*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

# 平成30年度 病害虫発生予報 第11号 (3月)

## A. 果樹の病害虫

### —モ モー

#### 1. 縮葉病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 前年の発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発芽後の散布は効果が劣るので、発芽前に実施する。  
(2) 薬剤散布に際しては、散布むらのないよう十分な量の薬液を樹の先端までかかるように丁寧に散布する。

#### 2. せん孔細菌病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 前年秋期の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発芽直前のカスガマイシン・銅水和剤の散布を徹底する。  
(2) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去する。

### —カ キー

#### 1. 炭疽病

予 想 発生量 : 並

根 拠 前年秋期の発生量はやや少なかったが、一部地域で発生が多かった。  
(±)

対 策 (1) 前年発生の多かった園地では、伝染源となる発病枝を除去し、適切に処分する。  
(2) 発芽前に必ず防除する。

#### 2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生量 : 並

根 拠 前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 前年発生の多かった園及びその周辺の園では、発芽前に薬剤防除を実施する。  
(2) 薬剤散布に際しては、散布むらのないよう十分な量の薬液を樹の先端までかかるように丁寧に散布する。

## B. 野菜の病害虫

### —ブロッコリー—

#### 1. 黒腐病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 2月下旬の1～2月どりで発生を認めなかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 薬剤散布は、予防的に実施し、初期感染を防ぐ。  
(2) 降雨や寒波に伴う強風の後などは、できるだけ速やかに薬剤防除を行う。  
(3) 発生の多い圃場では発蕾までに防除を徹底する。

## 2. 花蕾腐敗病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の1～2月どりでは平年と同様に発生を認めなかった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 降霜などによって発病が助長されるので、低温が予想される場合には防霜対策を施す。  
(2) 黒腐病の防除など細菌病防除を行う。  
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、銅剤を使用する場合には発蕾期以降の散布を避ける。

## 3. ペと病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の1～2月どりでの発生量はやや多かった。(＋)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 降雨後や曇雨天で多湿状態が続くときは薬剤防除を行う。  
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。  
(4) 発病株は放置せずに抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

## 4. 菌核病

予 想 発生量 : **並**

根 拠 (1) 2月下旬の1～2月どりでの発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病株は放置せずに抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(2) 圃場の排水を良くする。  
(3) 発生の多い圃場では株元を中心に、丁寧に薬剤散布を行う。  
(4) 夏期に湛水可能な圃地は、高温時に20日間以上湛水する。

－レタス－

## 1. 灰色かび病

予 想 発生量 : **多**

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生量はやや多かった。(＋)  
(2) 防除員報告では、発生の多い地区があった。(＋)  
(3) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。  
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(3) トンネル被覆後は薬剤がかかりにくくなるので、散布むらに注意して薬剤防除を行う。  
(4) 苗床からの持ち込みを防ぐため、苗床での薬剤防除を行う。  
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 2. 菌核病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでの発生量は平年並であった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、

- 直ちに防除を行う。
- (2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
  - (3) 灰色かび病防除に準じて対策を実施する。
  - (4) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

### 3. ペと病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでは平年と同様に発生を認めなかった。(±)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発生初期から薬剤を予防的に散布する。この場合、薬剤が葉裏に十分付着するよう散布する。特に結球期に発生すると、結球葉まで病気が進展しやすいので、発生を認めたら直ちに防除する。  
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(3) 被害残渣は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

### 4. 腐敗病

- 予 想 発生量 : **並**
- 根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでは発生を認めなかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 凍霜害にあった場合は速やかに薬剤防除を行う。  
(2) 腐敗病に対する感受性は結球期以降に高くなることから、結球初期を中心に予防的防除を行う。  
(3) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(4) 収穫は適期に行い、発病の増加のおそれがある場合は早めに収穫を行う。

### 5. 斑点細菌病

- 予 想 発生量 : **並**
- 根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでは発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。  
(2) 育苗は風当りの少ないところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。  
(3) ナモグリバエなどの食害痕から発病する場合がありますので、ナモグリバエの発生が多い場合には薬剤防除する。  
(4) 強風を伴う降雨が続いた後には薬剤防除を行う。

### 6. ナモグリバエ

- 予 想 発生量 : **やや少**
- 根 拠 (1) 2月下旬の3～4月どりでは発生を認めなかった。(－)  
(2) 3月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。  
(2) 葉に食害を認める場合は、結球初期までに防除を行う。  
(3) 育苗期後半から定植時には薬剤をセルトレイ処理する。

－タマネギ－

1. ベと病

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 2月下旬の発生は早生栽培、普通栽培ともに平年と同様に認めなかった。  
(±)

(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。

(2) タマネギと同一の病原菌によってネギにも発病するので、今後の発病に注意する。

(3) 越年罹病株は早急に抜き取る。

(4) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。

(5) 薬剤散布を行う場合には耐性菌の発生を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

2. 白色疫病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 2月下旬の発生は早生栽培、普通栽培ともに認めなかった。(－)

(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くする。

(2) 耐性菌回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) タマネギと同一の病原菌によって発生するニンニク、ネギの白色疫病にも注意する。

3. 腐敗病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 2月下旬の発生は早生栽培では認めず(－)、普通栽培では平年並であった(±)。

(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。

(3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜き取り、適正に処分する。

(4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。

(5) 窒素質肥料の過不足を避ける。

(6) 同一の病原菌によって発生するニンニクの春腐病にも注意する。

－ニンニク－

1. 春腐病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 2月下旬の発生を認めなかった。(－)

(2) 3月の気象は降水量が多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。

- (3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜取り、適正に処分する。
- (4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。
- (5) 窒素質肥料の過不足を避ける。
- (6) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギの腐敗病にも注意する。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 2月下旬の発生量は3～4月どりレタス、1～2月どりブロッコリーともに平年並であった。(±)

(2) 3月の気象は気温が高く(+)、降水量が多い(-) 予報である。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 今後作付けを行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. ネギアザミウマ

予 想 対象作物 : ネギ、タマネギ、ニンニク、アスパラガス、花き類

発生量 : 多

根 拠 (1) 2月下旬の発生量はニンニク、早生栽培タマネギ及び普通栽培タマネギで多かった(+)

(2) 3月の気象は気温が高く(+)、降水量が多い(-) 予報である。

対 策 (1) 光反射資材を敷設することで侵入量を抑制することができる。

(2) 施設栽培では、黄色または青色粘着トラップを設置するなどして、野外からの侵入に注意する。

(3) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵により新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。

(4) 食害痕から病原菌が侵入するので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。

(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。  
風の状況を確認し、飛散の恐れがあるときは散布作業を中止しましょう

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jpnn.ne.jp/kagawa/>